

ルネサンスの巨人と良書

ルネサンスの巨人、レオナルド・ダ・ヴィンチに関して述べさせていただきます。世界的に有名なのは、まず『モナ・リザ』そして『最後の晩餐』です。このほか、数々の絵を世に発表していますが、このふたつは、不朽の名画とされています。レオナルド・ダ・ヴィンチは一四五二年にフィレンツェに生まれ、生涯を科学的研究と芸術に身を捧げ、一五一九年にアンボワーズで死去。享年六十七歳でした。

私の寝室に、『モナ・リザ』の複製が飾っており、ベッドに横になると、正面に、微笑を浮かべて、私を見おろしているように見えます。

私はレオナルド・ダ・ヴィンチ特集の美術誌を買い求めてみたところ、絵画の巨匠としてか知識がなかったのに、意外な事に、万能の天才であったことを認識したのです。ダ・ヴィンチの不滅の業績は、絵画や彫刻だけにとどまらず、音楽や建築をはじめ、数学、幾何学、解剖学、生理学、動植物学、天文学、気象学、地質学、地理学、物理学、光学、力学、土木工学等々、その探究は限りないものです。

まったく驚くべき、万能の天才だったので。今から五百年前の「ルネサンスの最盛期」を生きた偉人は、多くの人を惹(ひ)きつける、明るい寛容な人柄であったと書いてありました。

彼は大学も出ていないし、今でいう中等教育も受けていないのです。十代の半ばで、ヴェロッキオの工房に弟子入りしています。彼は学歴がないことを、少しも恥ずかしいと思わず、ただ「経験」を積み重ねていったのです。

では、彼が斯(か)くも多くの学問を習得し、万般の価値創造の探究を広げていった、その無限の可能性は、いったいどこから生まれたのか。その大きな力は何であったか？その一つとして、「読書」の努力があったことを見のがすことはできない。そして、「語学」にも力を入れたことを。

ダ・ヴィンチは、先ほども述べたように、思うように学校に行けなかったが、古代の言葉も独学で学んでいったのです。まず、「読書」を習慣づけ、語学にいどんだ。こうした地道な鍛錬によって磨いた「語学の力」を武器にして、彼は古今の書物を、かたっぱしから読破したのです。それが源泉となり、彼の芸術や哲学、そして広範囲の学問を深めていった、ということです。

ダ・ヴィンチは、読書を通して、英知の先人たちと対話を交わしたのです。彼にとって「読書」は実に楽しく充実した時間であったと思います。「良書」を選び、それを謙虚(けんこ)に学んでいくことで、後世に偉大な足跡を残したのです。

そこで、私はみなさんに訴えたいのです。いまからでも遅くはありません。「良書」を読みましょう。

ある哲学者は、『たゆみない読書の持続によってこそ、頭脳は、はつらつと回転を増しながら、みずみずしい』創造の力』を發揮できる』と断言しております。

「六十の手習い」という諺がありますが、年とってから学問を始めることの意です。今は八十年代。七十の手習い、老いの学問も通用する世の中です。ゆえに、どんどん読みましょう。大いに読みましょう。そして己自身の頭脳を若返らせようではありませんか。

ちなみに、私の町内に住む八十四歳のおばあちゃんは、暇あることに図書館通いをしています。最近、パソコンにこつていて、パソコン教室に片道三十分歩いて通っているそうです。何時みても若々しくて、元気いっぱいです。そのお宅では、嫁さんも、お孫さんも本を読むのが日課になっているとのこと。『親の後ろ姿を見て、子は育つ』といいますが、このお宅は、おばあちゃんの読書好きに感化されたと思えてなりません。

おばあちゃんは私に、ケラケラ笑いながら、

「あたしゃ、根が馬鹿だから、本でも読んでいないと、ボケちまうもんでね。それに、頭がからっぽだから、パソコンでもやって、脳ミソに活を入れないとね、そうでもしないと、生まれつき、ノウテンキなもんでさ」

と小さな体をゆすって言いました。

どうして、どうして、この輝いているおばあちゃんこそ、人生を遊樂している姿を私たちに示しているのです。子供や、孫に、本を読み、と言うまえに、先ず自分が本に親しむくせをつけることが先決です。自身が実行しないで、他の人にすすめても実感がともならないと思います。

そこで読書は、まず聞くことから始めるのが定石のようです。母親が幼ない子どもに寝物語りをする。子どもは絵本を読んでくれとお母さんに言う。「絵本を読んであげるよ」といって、子どもがいつそう愛しく思えます。「子どもと一緒に絵本を楽しんできて、これが私の子育てと、思えるようになりました」と母親は異句同音に言います。

「こどもの本の童話」代表の川端強氏は、『絵本・その小さな魔法』の本で、次のように綴っています。

「聞く、話す、読む、書く、という言葉の力のなかで、最も早く発達するのは、聞く力です。子どもは、絵本を読んでもらえば…つまり、聞くことができれば…ずいぶん深い内容を理解できますし、情感も深めていくことができます」と。

更に川端代表は、聞く、話す、読む、書く、に関して、「真に学ぶ力を」と題して、言葉の力 言葉をつなげて新しいものを組みたてる力(想像力) お話を集中して聞く力 抽象的な思考力 活字や本への親近感 知的な好奇心…。以上6項目が養われると述べています。私たちは幼年期に「かちかち山」「浦島太郎」「花咲爺」「一寸法師」などの童話や昔話を聞いて育ちました。「むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんが、すんでいました。おじいさんはやまにしばらくりに、おばあさんはかわにせんたくに…」誰もが暗記している「桃太郎」は、聞く、話す、原点ともいえましよう。

昭和初期生まれの私と同級生は、読書好きが多くいます。その理由は、担任の先生が常時、名作を朗読してくれたことに起因します。「ああ無情」(レ・ミゼラブル)に感動し「巖窟王」に心を躍らせ「路傍の石」に、涙を流し「敵中横断三百里」に興奮したものです。この先生の語りによって、読書への意欲が高まり、友人と図書館通いをしました。そして、「読む」から「書く」へ移行していったのです。

ここで考えられることは、父母が幼児にすぐれた絵本や物語りを読んで聞かせることで、子どもは洗練された美しい日本語を耳にし、未知の世界へ入ります。親の声をとおして語られる物語りの楽しさにのせて、身につけていきます。絵本を読んでもらっている子どもは、言葉の発達が早く、表現も豊かになることは確かです。また教師による読み聞かせ授業も、成長期の少年少女には欠かせない重要な読書への、要素となることは、私の経験からも断言できます。

また読書によって培われる豊かな言葉は、その人の考え、思い、学び、表現するための手だてです。人に話しかける、語りかける美しい日本語は自身を豊かにし、人の心も豊かにするでしょう。それは人が人らしく生き、人とかわりをもつて暮していくうえで、大切なことと思います。

かつて私が感銘を受けた名著の中で、「信念に生きる青年のドラマ」「モンテクリスト伯」"大いなる運命に挑戦した"『ロビンソン・クルーソー』そして「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり」で有名な近代日本を代表する思想家にして教育者・福沢諭吉の『学問のすすめ』などで、人生観・社会観を学ぶことができました。故に如何に活字に親しむことが大事であるかを訴える次第です。

ある大学の創立者は「活字文化」について、次のように述べています。

二十一世紀へ、真実の「活字文化」の復興を！これが、私たちの大きな願いであります。人間は、「良き活字」に触れてこそ、深い思索ができるし、頭脳も鍛えられる。読めば、愚かにならない。だまされない。

テレビなどの映像だけでは、どうしても受け身である。刹那(せつな)的になり、衝動に駆られやすくなってしまふ面も指摘されています。

良書をはじめとする「正しい活字文化」が衰弱すれば、人間が人間らしく行動してゆくための、精神の泉は枯れ果ててしまいます。

私が、ともに対談集を出した、文豪アイトマトフ氏も語っておられました。

「本は『人類の未来』です。人類は本を『文化の宝箱』として、未来へ持っていけるのか。それとも『本の文化』をあきらめて、低俗なものが、はびこるにまかせられないのか。その岐路(きろ)に立っていると思います」と。(中略)

近年、青少年の活字離れは深刻です。最近の学校読書調査によれば、「一カ月の間に本を一冊も読まない高校生」が、六二・三%もいるといわれています。

現在、各地の書店等の方々も、さまざまに工夫され、子どもたちを良書に親しませていくと読書の啓発を進めておられます。地道な尊い(ごんい)貢献に、私は心から敬意を表します。子どもたちを「本好き」にしていくことは、いじめや非行などを減少させるうえでも、大変、大きな効果があるといわれます。

ともあれ、まず、大人が本を読み、学んでいくことです。その姿を、子どもたちに見せていく。なканずく指導層が、その模範を示していかなばなりません。

私の恩師は青年に対して厳しく言われました。「くだらない雑誌なんか読んで、面白がっているようで、どうする。三流、四流の人間になるのか。長編を読み。古典を読み。今読んでおかないと、人格はできない。本当の指導者にはなれない」と。

以上のように創立者は述べていますが、「活字文化」を復興させるために、各人が一日に二十分でも三十分でも暇(いとま)をつくって、深く静かに思索し、読書する習慣を身につけ、そして品位と教養を高めて、自己を確立することが大事だと思えます。特に読書は少年・青年時代の特権でもあり、若い時に読んだ本は、澁刺(しぶさ)たる精神の血となり肉となり、やがて生涯の骨格を形成することにもなると思うのです。

「活字離れ」が指摘されて久しいが、昨今では明るい話題もあります。第五十二回読書調査(全国学校図書館協議会と毎日新聞社が共同で実施)では、二〇〇六年五月一ヶ月間の小学生の平均読書冊数は過去最高の九・七冊となり、前年に比べ二冊も増えたとのこと。また、朝の読書運動を行う学校は二万五〇七五校(朝の読書推進協議会調べ)に上り、図書館の貸出冊数は約五億八〇七三冊(社会教育調査)で過去最高を記録し、子どもの読書意欲の高さがうかがえます。

良書は、豊かな想像力と思考力を育み、特に朝の読書は、学力向上の基礎になるだけでなく、「子どもが本来持っている『生きる力』を引き出す」と高く評価されています。朝の読書が定着した学校では、「子どもに落ち着きが出てきた」「遅刻やいじめが少なくなった」「読解力が身についた」などの効果があることの報告がされています。そこで望まれるのは、子どもたちの読書意欲を持続させるための、環境整備の遅れを文科省は向上させることに前向きに取り組んでほしいと切望します。

ある大学助教授は、「良書は、青年の精神の滋養であり、また、異文化を理解し、世界を知る最大の教師となる」と述べ、ロシアの文豪トルストイは「良書を読むことは善に対する意欲をかき立てる」(注・トルストイ著『ことばの日めくり』小沼文彦訳)と読書の意義を述べています。

「秘めたる力」を全て出きつた、文化の巨人レオナルド・ダ・ヴィンチを参考にして、たとえ一冊でもいい、月に一冊でもいい、「読書」の習慣をつけたいものです。

「近頃、お父さんが本を読んでいる」

「あの忙しいおかあさんが、台所で本を読んでいたわ」

「口やかましいお姉さんが、おとなしいと思ったら、お部屋で本を読んでいるよ」

「おじいちゃんが、いねむりしている手に、『赤毛のアン』の本があったよ」

「そういえば、おばあちゃんもボクの『指輪物語』を読んでいたよ」

となれば最高です。